

ボードレール「聖ペテロの否認」について・続

松本 勤

五 略解の二

「聖ペテロの否認」の最後の詩節から始めます。ここではまず伊狩裕さんが私に話してくれた第二の視点を取り上げます。詩における「私」がどういう立場にいるかという問題でした。「私」はペテロに与くみしている。しかし同時にイエスにも共感を寄せている、と思える。ボードレールはイエスを否定するペテロでもあり、否定されるイエスでもある、と読むのが妥当ではなからうか。では、なぜこんなややこしい関係が成り立つのでしょうか。内面において、詩人はイエスと、ペテロとどうかかわっているのでしょうか。むずかしい問です。

「私」の登場の仕方は、発表された時期によって微妙に違ってきます。そのことを、ティレ（ダツシユ）の用法に着目して、印刷された三つのテキスト、「パリ評論」（一八五二年）、『悪の花』初版（一八五七年）、『悪の花』再版（一八六一年）をくらべてみます。

「パリ評論」のテキストでは、第五詩節と最終行以外にティレはありません。第五詩節は念のために書き出しますと、こ

——砕かれた君の心（一九八六年ジョゼ・コルテイ版では誤植?と注記）のおそるべき重みで

両の腕が引っぱられ長く伸びたとき、——君の血と

君の汗が蒼ざめてゆく君の額から流れ落ちたとき、

——君が万人の前に標的のように据えられたとき、

最終行までティレは入りませんから、全体が平ったく目に映るなかで、この詩節がとくに強調されているかのようです。視覚的にそうなる。イエスのなまましい処刑の場面に山場を設けたのでしょうか。ティレによって視点をすこしずらす、あるいは一呼吸おくとというボードレールのやり方ではありません。全体の流れからすると不自然で、あと最終行まで平坦にすすみます。最終詩節は三つのテキストでそれぞれ異なりますから、紙面をとりますがすべて四行とも書き出します。まず一八五二年「パリ評論」の四行。

そうだ私は立ち去るのだ、この私は、心満ちて

行動が夢の姉妹でない世界からは。

願わくば剣によって立ち剣によって滅びんことを！

——聖ペテロはイエスを否認した。よくやった。

最後の行でようやく視点がすこしずれます²。一八五二年のテキストで読み終えると、ペテロが最初から舞台を領しているという印象がつよい。イエスに問いかけているのもペテロと読め、そのペテロが私は立ち去るのだと言い、そして、最後にそのペテロに詩人がよくやつたと同調します。勿論、ボードレールが自分をペテロに託している、そしてペテロを通じてイエスと絡まっていることに違いありません。しかしその託し方が微妙に異なってきました。詩人である「私」の濃度がうすいのです。そこで第三十一行は、より直接的に、聖書に結びつきます。

イエスはかつて自分は地上に平和をもたらすために来たのではなく、剣をもたらすために来た（「マタイによる福音書」10—34）と語りましたが、逮捕される時は抵抗しません。弟子の一人——ヨハネによればそれがペテロです（「ヨハネによる福音書」18—10）——が大祭司の手下に切りかかり、片方の耳を切り落とします。イエスは「剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる」（「マタイによる福音書」26—52）とおしとどめました。これに対し、ペテロが剣によって滅びたいと抗議しています。ゲリラになっても抵抗したい。そこでペテロはイエスに対して否定的になります。「私はその人をしらない」と否認するのも、怯懦ではありません。知らないと言うだけでなく否定するのです。

一八五七年の初版（の棒組ゲラ刷り）以後再版まで、第九行冒頭にティレが入り、第五詩節のティレはなくなります。

——ああ！ イエスよ！（この感嘆符は再版ではヴィルギェルに変わる）オリーブの園を思い出せ！

最初の二つの詩節で一応の区切りがつき、その後のイエスの存在がいつそう浮上します。ついで最終詩節。

——そうだ、私は立ち去るのだ、この私は、心満ちて
行動が夢の姉妹でない世界からは。

願わくば剣によって立ち剣によって滅びんことを！

——聖ペテロはイエスを否認した……よくやった！ (初版)

——そうだ、私は立ち去るのだ、この私は、心満ちて
行動が夢の姉妹ではない世界からは。

願わくば剣によって立ち剣によって滅びんことを！

——聖ペテロはイエスを否認した……よくやった！ (再版)

初版再版とも、最終行の「否認した」のあと、ポワン・ヴィルギユル(「十三詩篇」ではヴィルギユル)がポワン・ド・シユス
パンシオンに変わります。最初はペテロの行為に対するまずはあつさりした断定でした。それが、詩人の心のなかの余白の
部分というか、わずかながらもあいまいな部分を表出し、その余白を埋めるかのように、「よくやった！」とおっかぶせて
感嘆符がしめくります。他の細部は省きますが、詩人の心のフレと呼応して、技法が練られてゆきます。

初版と再版の差は、最終詩節冒頭のティレの有無です。格別の違いはない、と言ってすませるかもしれませんが、そう
でないともいえる。再版ではイエスへの長い呼びかけ問いかけがつづいたあと、ティレで一呼吸おいて、すうっと「私」に

移行しそのまま最後まで「私」の領分がつづきます。この「私」の声は詩人の声という趣がつよい。そして、聖書への連想からペテロを思わせる一行を用意しておいて、詩人の声のなから標題と呼応して、ペテロがあざやかに呼び出されます。一方、初版では「そうだ、私は立ち去るのだ」の前にティレが入りますから、詩人とペテロがないまぜになっていることは当然としても、ひとまずペテロの声とも読みうる三行を置き、さらに最終行のティレで転換して最後に「よくやった」と詩人の声がしめくくりまします。

三つの段階を経て、ペテロの声、ペテロの反逆から、詩人の声、詩人の反逆へと重心が移ってゆきます。詩はボードレールの「私性」をまし、「私」の表出において自由度をまします。「私」（ペテロの仮面をかぶった私）がイエスを追いつめながら、イエスを否定することによってイエスと結ばれている、否定するペテロも詩人、否定されるイエスもなんらかの意味において詩人という構図は、再版においてもつと透けて見えてきます。

なぜボードレールは三つの時点において、分銅の位置を少しずつずらしていったのでしょうか。簡単に答えは出ません。勿論のこと、並ならぬ執念をもってなされた詩の技法の追求とかかわっています。そして、その追求の仕方は、詩人が現実世界と切り結んだ自らの位相の認識とかかわっています。さしあたり、外的事情として、次のことは考えられるでしょう。

すでに述べましたように、「聖ペテロの否認」は初出のさいに問題視され、初版を出すときもボードレールはひどく警戒していました。そこで言い逃れが可能な余地を残す必要がありました。「下層民にくみする神学者」の仲間として告発されたならば、イエスキリストに対して「征服者の役割、平等をもたらし破壊するアッティラの役割を果されなかったことを遺憾としている」徒党と見なされたならば、その徒党と詩人は別者である、自分は「完璧な俳優」として、パステイシユを作ったのだ、という言い逃れを。ところがペテロの詩は告発を免れました。この詩については無罪です。そこで一八六一年

の再版では、詩人はより自由な立場に置かれています。「私」の表出はより内面化し鋭くなりました。「聖ペテロはイエスを否認した」——この一句がいろんな意味で詩人にインスピレーションを与えたであろうことは、最初から変わらなかつたでしょうが。

最終詩節の四行において、詩のアンビギュイテが噴出します。最初の二行と次の各行が、それぞれ独自の言い切りをしています。が、その断ち切るような言い方には、あまたの含みがひそんでいます。しかも、各行が互いに相矛盾しているようにも、相通じているようにも見える。

この世の現実から遠ざかるという表明と、剣に終始して行動のうちに滅びるといふ願望とは、相反しつつも、切迫した同一の感情の揺れの両面として理解されます。行末におかれた「心満ちて」*satisfait*は、十分反語的に読め、「私は」、余人は知らず「この私は」ということさらな強調が、「心満ちて」と語る心情の振幅を後押ししています。しかも脚韻の踏み方がイロニクな対比を見せて心憎い。*satisfait*と*il a bien fait*と、断定調のなかにゆれを内包しています。*reve*（夢）と*glaise*（剣）と、相反しつつも通底しています。

剣によって立つといふ願望の表明も、所詮は剣によって立つことも滅びることもできぬと知った者の、捨身の、ねじれた願望と読めます。この一行については、さきに聖書から引証しました。それとは別に、響き合う詩句を一つ挙げておきます。ボードレールの友人であつて、六月蜂起の折も共に行動した民衆詩人ピエール・デュポンの『歌と歌謡』第一巻に収められた「諸国民の歌」、そのなかで六回くり返されるルフランの部分です。一八四七年と記されています。

大いなる運命の日が昇る

ラッパと太鼓の音とともに。

おお戦闘よ！　これがお前の最後の日だ！

剣は剣を打ち砕くだろう、

そして戦いから愛が生まれるだろう。

ボードレールはこの最後の二行 (Le glaive brisera le glaive/Et du combat naîtra l'amour) を、一八五一年の「ピエール・デュボン著『歌と歌謡』への序文」に引用しています。「牢獄にあつては、詩は反逆となる」という一文によってよく知られている「序文」です。いまの二行の引用の前後、ボードレールはこう書いています。デュボンも一度だけ「破壊の精神の効用」を認めた。だが、それはこんな詩句の言葉によつてだ。これらの政治的な詩を読み返すと、それらは、互いに、「人類への愛という共通の絆」によつて結び合わされている、と。ペテロの詩の「剣」のうちには、聖書の一句と一八四八年の友情とが呼び交わされているようです。ただしペテロの否認の剣からは、とうてい愛も友愛も生まれそうにありません。他を破壊し、己を破壊する永久革命的な切っ先がざらりと光つて見えるようです。

「行動が夢の姉妹でない世界からは」——この一行から、今日の読者はある種の阿呆らしさを感じるかもしれません。わかりきったことを、お目出度いというか……。しかしそのような反応はすでにマラルメの見方のなかに身を寄せているのです。マラルメはカザリス宛の手紙（一八六三年六月三日付）で、この一行のばかばかしさを語っています。「ある現代詩人の愚かさはへ行動が夢の姉妹でないことを嘆くまでにいたりしました。エマニユエルはそれを悔む人たちに属しています。なんと、事がこのようでないのなら、夢がこんなふうに萎み低められるのなら、いったいわれわれはどこに逃げ出したらいい

いのでしよう。地上にうんざりし、隠れ家に夢しかもたないわれわれ不幸なものは」。サルトルの流儀でいえば、文学者たちは夢と行動の決して結び合わぬことを自明の前提として受入れ、普遍的な否定のうちなる夢へと没してゆきます²。それが一八四八年からルイ・ナポレオンのクー・デタにいたる歴史過程が文学の世界に残しておいた出口の一つです。

しかし、ボードレールはマラルメの思考圏からも、世紀末のサンボリストたちのそれから、違った位置にいます。

ボードレールは徒やおろそかに「行動が夢の」と書いたものではありません。ボードレールの「夢」はマラルメの「夢」とつながりうるかもしれないが、同じではない。この詩のなかでは、シュルレアリストの夢でもない。むしろ後年のボードレールの手記に見られる、複数の *uopies* と通じ合う性質をなにごとか蔵しています。

「一八四八年が面白かったのは、各人がそこにスペインの城のように数々のユートピアをつくったからにほかならない。一八四八年が魅力的だったのは（滑稽さ）の過剰のゆえにほかならない」（『赤裸の心』六）。

書かれた時期は特定できません。往時を振り返っての「滑稽さ」は、過去の同時代における大まじめを否定するものではないでしょう。一八四八年はあらゆる思想がないまぜになり沸騰した時でした。ボードレールは人々が「夢見ていた」輝かしい二月と、ポスト二月と、殺戮において無類であった六月の凄惨と、ポスト六月と、だめ押しのようなクー・デタまで、そのすべてをわが身に受けとめました。西欧近代の大きな転換期のただなかに生きることが、詩人の明晰に、そして晦渋に、研ぎをかけました。ペテロの詩の「夢」は、一八五二年、五七年、六一年と、次第に詩人のなかで普遍化され、抽象化されていったかもしれませんが、イロニーの気分をこめて。しかし臍の緒は一八四八年とつながっていて、切れてはいません。すなわち、詩は咀詛と反逆と否定の詩であることをやめない。そこで、私はこれから、詩の初出から遠くない時期にさかのぼることにします。相当のまわり道をします。しかし、これはボードレールに対する後世の者の一つの礼節と考えます。

ペテロに対して、詩人は「よくやった!」としめくくりします。ここにも「心満ちて」と同様に、限りなく捉えがたい心境がうかがえます。表現上の潔さと内側にある執着とが相照らして、迫力もちます。ペテロは「激しく泣い」てはいません。その人は知らない。「否認」するだけです。ある状況において知らないと言言することには、はかり知れない苦痛を伴うでしょう。だが、ここでペテロは、そのようなやむをえない選択をしたというよりも、師と仰いだイエスを見捨て、イエスの思想と行動を間違いだと「否定」したと読めます。だから、「よくやった!」と言い切った、にもかかわらず、この言い切りの奥にあるのは何かと私たちは問いかけざるをえません。

「聖ペテロの否認」が読者の情動にゆさぶりをかけるのは、ある切迫した状況を己に受けとめた人の「私的」衝動のごときものです。その衝動が相反する感情をかかえこみながら、鋭角的に詩句を突き上げている、この点を感じるかどうか、この詩の読み方の分かれ目となります。

- (1) 『外国文学研究』七十七号の同各の論文をうけつぎます。前回の目次、一 ペテロの否認、二 先蹤をすこし、三 サタンとイエス、四 略解の一。『悪の花』再版の訳詞および原文は、三三―三五頁および三七―三九頁参照。
- (2) ちなみに、「パリ評論」に先立つ「十二詩篇」では、ティレは一つもなく四行詩三十二行がべつたりつづきます。
- (3) Pierre Dupont, *Chants et poésies*, Garnier Frères, 1875, p.75.
- (4) サルトル「マラルメの現実参加」渡辺守章訳、『マラルメ論』中央公論社一九八三年所収、六七―八頁参照。

六 一八四八年のイエス・キリスト

二月革命の日々、イエス・キリストはさまざまな形で民衆に親しい、民衆に崇められ、民衆を勇気づけた存在でした。フランク・ポール・ボウマンの『ロマン主義的キリスト』という研究には、一八四八年におけるキリスト、カトリック教会、司祭と、民衆、共和国との連帯を示す、当時の雑誌、パンフレットの類からのあまたの文章が引用されていて、私たちがその時代の雰囲気近づけます。ボウマンによれば、大革命の時期にも、キリストはナザレのサン・キュロットと呼ばれこともありました。が、それは寛容、忍耐、服従を説く兄弟愛にとどまった、だから著者は「福音書は人間のみをつくらうと欲し、市民とはかわり合いをもたなかった」というサン・ジュストの言葉でしめくり、一方、一八四八年については「バリエードのキリスト」と題する章で始めています。

「革命家イエス」が巷にあふれました。十字架のキリストと栄光のなかで蘇るキリスト、これが中心的イメージとなりました。人類のために血を流し蘇ったキリストと、革命をおこし、再生した民衆、フランス、人類とが、当初は二重映しになったのです。

アルシーヴ叢書の『四八年の人々』にも数々の証言が収められており、キリストを描いた二枚の図版も載っています。一つはダヴィド・ダンジェの絵、キリストが地球の上に座して、右手で球体の表面に、リベルテ、エガリテ、フラテルニテと書いています。もう一枚は、編者のアギュロンが「市民的寓意にかこまれたキリスト」と説明している図像です。やはり中央に地球の上に立つキリストがフラテルニテと書かれた帯状のものを左手にもち、右手は高くかかげ、両の手の掌には大き

な傷（と血）がきざまれています。地球の上には原罪のへびでしょう、とぐろを巻いていて、キリストがこれを踏みつけている。怪物めいたその顔にエゴイスムと記されているのが時代を思わせます。左右には二人の女性が天使の翼をつけ、それぞれの頭上に「リベルテ」「エガリテ」と記されている。革命のシンボルとして女性の天使を出したのでしょうか。右手の女性は本を開いていますからルカ、左手の女性の持ちものは司杖のようなもの、十字をかたどった剣とも見えペテロを連想しましたが、いずれも寓意の読み違いかもしれません。一八四八年革命の百年を記念して沢山の出版物が出ました。その一冊の図版集に大きな図で収録されていますので、これだけのことがわかりました。

多くの同時代人や二月革命の研究者は、この革命を福音書的と呼んでいます。じつさい、大革命、七月革命、二月革命、パリ・コミューンとつづくなかで、一八四八年は、反教権的でなかった例のない革命でした。臨時政府の側もカトリック教会の側も、共和制と教会の共存結合を説きました。谷川稔氏の論文「二月革命と『カトリシスム』」を読めば、その具体的な諸相とともに、すでに七月王政期から数多くの司祭が労働者層の劣悪な境遇に目をむけていたこと、教会の組織の中核に近い人までが、自由主義経済、初期産業資本主義のレッセフェールの体制が生みだす社会的矛盾を指摘していたことがわかります。また、サンシモン派（アンファンタン）、フーリエ派（コンシデラン）、カペ派、いずれも福音主義をとり入れました。いわんや、「カトリック社会主義」を名のつたビュシエやコンボンは、社会的危機をつよく認知し、この地上のものとしての「福音によって告知された王国」を説いていました。ビュシエ派の多くは、二月のバリケード市街戦に加わり、ビュシエ自ら国民衛兵の中隊長として、テユイルリー宮襲撃の先頭に立ったということです。

こうした事情を念頭において、ボードレールが仲間二人と四八年二月二十七日（第一号）と、三月一日（クレペ、ピシヨワの推定、第二号）に発行した新聞「サリュ・ピュブリック」を読むと、わかってくるのが沢山あります。新聞の題名に

ついでには、一八九三年の公安委員会 Comité de salut public への連想をこめて、そのままカナで表題とした阿部良雄氏を踏襲します。編集者シャンフルーリ、ボードレール、トゥーバンと記されており、どの項目をボードレールが執筆したかという詮議がなされてはいますが、もとより特定できるものではなく、革命初期の高揚期にあつて、彼ら三人のほぼ異論のない見解を読み取ればよいと思います。費用を受けもつたのはトゥーバン、ボードレールは白い作業服を着て街頭に売りに出たそうです。

「サリュ・ピュブリック」は、二月の革命を大革命を継ぐもの、それを乗り越えるものとして位置づけています。

「断乎として四八年の〈革命〉は、一七八九年の革命より偉大になるだろう。なんといつても今回は前回の終わったところから始めるのだから。

共和国万才！」（第一号の末尾）

「八九年には、社会は理性主義的で物質主義的であつた。——今日、社会は根底的に精神主義的スピリチュアルでありキリスト教的である。それがゆえに、九三年は血にまみれた。——それがゆえに一八四八年は道德的、人間的で、慈悲深いであろう。」（第二号、見出し「最初の革命と最後の革命」）

新聞は二月の興奮をつたえています。当然見方は甘く、希望態が現状認識のなかに入りこんでいます。精神主義的でありキリスト教的でありえたのはわずかの時期です。時を経ずして四八年は血みどろになります。前世紀の革命をこえて、「自らの義務を知った」民衆主導の、人間的友愛的革命が達成されるという夢は淡く消えます。十八世紀の革命が「上昇線を描いて」進んだのに対し、一八四八年の革命は早ばやと下降線を辿り、ヘルイ・ボナパルトのブリュメール一八日」にいたる、二度目は笑劇に終わると、マルクスはそっけなく、皮肉をこめて書いています。ボードレールも早ばやと冴めた目をもって

状況を見たと思われれます。特定しうるだけの資料はまったくないので、彼は自分の革命期の行動を、つとめて、意図して語らないようにしたのではないか、そんなふしがあります。そして、六月の血みどろに加わる。詩人にとって、第二共和政の運命は笑劇とってすませない、血の臭いと精神の動顛を自分の内奥にこびりつかせる歴史過程でした。「聖ペテロの否認」は、ある層においてロマン主義のパロディ、別の層において聖書のパロディ、そしてそれらと絡まって同時代史のパロディの趣があります。パロディというには偽装不足というか、ストレートすぎますが、ともかくもこれをパロディ化するには、多少とも詩人の魂に近寄るならば、気が遠くなるほどの精神的バネを要したことがわかります。

さて、新聞の主要なテーマとして、「民衆」と「キリスト教」を、とくにペテロの詩との関連において後者をおもに取り上げます。

民衆は二月のヒーローとして扱われています。「二月二十四日は人類のもっとも偉大な日だ！ 未来の諸世代は、この二月二十四日をもって、民衆の主権という権利が、決定的な、取消不能のものとして到来した日とするであろう。三千年の奴隷状態の後、この権利が世界にいまついに登場したのであり、暴君たちの憤激もこの権利に勝つことはないだろう。フランスの民衆よ、君自身を誇りたまえ。君は人類の贖い主なのだ」(第一号、見出し「二月二十四日」)。ここでも民衆の役割とキリストの役割が重なっている。

二月革命の一時期、歴史に例を見ないほど民衆という語が輝かしいアウラにつつまれました。それまでは、民衆は都市の周縁にしか位置しない、警察の監視を必要とする存在と見られがちでした。文明の埒外に生きる「危険な階級」(ルイ・シユヴァリエ)とみなされました。「サリュ・ピュブリック」は十九世紀前半の民衆観に抗議しています。だから、歴史家のなかでミシュレのみが評価されます。歴史は民衆によってつくられる。新聞ではしばしば大文字で「民衆」Peupleと印刷

されています。民衆を神話化しているといえます。民衆は一括して、社会学的区分なく民衆です。それが、二月のパリの雰囲気に近いものでした。ブルジョア階級のある階層も一時的に民衆と手を組みました。大文字の「民衆」がまもなく分解し、さらに四年先にはほとんどすべてが帝政を支持することはすでに述べました。しばしば引用される「民衆の美しさ」(第一号)と題する文章を挙げておきます。

「三日前から、パリの住民は、肉体的な美しさにおいて感嘆すべきものがある。徹夜と疲労が体をかがませる。しかし、もろもろの権利をまた獲得したという感情が体をしゃんとさせ、皆の頭を高々とさせる。顔つきは感激と共和国の誇りに輝いている。彼ら、破廉恥な奴どもは、自分に似せて——全身これ胃袋と腹にして——ブルジョア階級を作ろうとしていた、〈民衆〉が飢えに呻いている間に、だ。民衆とブルジョア階級は、フランスの体から、腐敗と不道徳のあの風を振り落とし、美しい人間たち、身の丈六ピエに達する人間を見たい者は、フランスに来るがよい。一個の自由人 (Un homme libre——詩「自由人と海」を連想させます) は、何者であろうと、大理石像より美しく、かつ背丈矮小であろうと、額を高くかかげ、心に市民の権利を自覚しているならば、巨人に匹敵すること必定なのである」。

パリの民衆はみな背が高く見える。偉大になった。ベンヤミンの巧みな数行があります。「バルザックはいわば素朴派である。彼の描く人物たちは、彼らが行き来する街路よりも大きい。ボードレールは、建物の海を、家の高さにまで及ぶその波とともに描き出した最初の人だ。おそらくオースマンと関係がある」。ボードレールは、バルザックの人物は各人が、門番女にいたるまで天才を有する、と書いています(『テオフィール・ゴージェイ』)。そのバルザックの、一人一人がしっかりと姓名を持つ人物の大きさを、二月のボードレールたちは名もない「民衆」に見出したのです。そして、それから十年を経て、詩人は「建物の海」の底の街路をうごめく群衆を、砂つぶのような群衆を、自らもその一人となって、誇り高い棄民

として描くようになります。

次のテーマに移ります。第二号に「司祭たちに！」と題する呼びかけがあります。その後半を紹介します。

「司祭たちよ、ためらってははいけない。大胆に民衆の胸のなかに身を投じたまえ。諸君は民衆に触れて再生するだろう。民衆は諸君を尊敬している。諸君を愛するだろう。イエスキリスト、君たちの主 (maître) はわれわれの主でもある。イエスキリストはわれわれとともにバリケードにいたのであり、われわれが勝利したのは、彼によって、ひたすら彼によってである。イエスキリストは現代の共和国すべての創設者だ。誰であれそれを疑う者は、福音書を読んでいないのだ。司祭諸君、大胆にわれわれのもとに加わりたまえ。アッフルとラコルデルが君たちにその範を示している。われわれは同じ神をもつ。なぜ二つの祭壇が要るのだ。」

すでに述べた二月における革命派とカトリックとの協調姿勢がよく現れています。ラコルデルは「民衆派カトリック」(ラムネの流れをつぐ)のリーダー、臨時政府が成立した直後のミサで、ノートル・ダム寺院前を埋めつくした民衆の前に、「眼前の事態に神の臨在を説き、宗教とフランス共和国との同盟について執弁をふるった」。この説教は後世に語りつがれたといえます。アッフルは当時パリの大司教であって、二月革命を語ってこの名は抜かせない重要な存在でした。二月のバリケード市街戦で重傷を負った人々に秘蹟を授けてもらおうと、蜂起した民衆は僧侶を探してまわりました。大司教みずから方々を訪れ終油の秘蹟をとりおこないました。三月初旬には臨時政府を表敬訪問します。六月反乱のさなか、二十五日に、アッフルは和解を呼びかけるべくフォーブール・サン・ピタントワヌのバリケードに赴く途中で、いずれの側から確定できぬ発砲を受けて倒れます。アッフルの死は教会と社会主義派との、すでに十分怪しくなっていた和解にとどめをさし、民衆弾圧を激化させます。ちなみに、ボードレールの反逆詩篇では、「われわれは同じ神をもつ」どころではありません。神

は天上と地獄に分極し、サタンが「別の父」となる。

新聞の第一号には、「よいニュース！」の見出しのもとに、次のようなエピソードが載っています。

「——昨日、二人の司祭がバリケードを乗りこえようとした。〈民衆〉の何人かが罵った。それより数多い者たちが司祭を擁護した。〈民衆〉のこうした高い理性はすばらしい。

——さらに立派なこと。テユイルリー宮の礼拝堂で木彫のみごとなキリスト像が見つかった。誰かが叫んだ。われらの主だ！ 帽子を取れ！ ——全員が帽子を脱いで、聖ロック教会までキリストを勝利者さながらかついでいく」。

クレペによれば、この最後のエピソードはジラルダンの新聞「プレス」紙二月二十六日号の記事に出たそうです（プレイアード版注）。この話は何度も伝えられ、数々の詩や版画の題材になりました（同じ注）。ダニエル・ステルン——マリー・ダグー伯爵夫人、今では男性名で知られています、フランツ・リストと派手な恋愛さわぎをおこし、三子をもうけ、その一人コジマがワーグナーと結婚します——の『一八四八年革命史』（一八五〇—五三）にもこの記事が書かれています。その部分を訳します。

「マリー＝アメリーの祈祷所に入ると、みな脱帽した。ひとりのエコール・ポリテクニクの学生がキリストの十字架像をつかんで、〈これがわれわれすべての主だ〉と叫んだ。それから、大勢の叛徒が列をなして後につづき、彼はサン＝ロック教会まで十字架像をはこび、そこで司祭の手に渡した¹⁰」。前述の『一八四八年』にも、その行列の版画が載っています。小さなキリストの燦刑像です。先頭の、帽子をとり、右手で十字架を指しているのがポリテクニクの学生でしょう。いろんな階層の人々がつづき、両側に国民衛兵らしいのが銃を捧げて敬礼しています。これから類推するに、ダニエル・ステルンと版画の方がプレス紙の記事に近いのではないかと思えます。「サリュ・ピユブリック」からは、エコール・ポリテクニ

ックの学生が抜け落ちていきます。編集者の一人であるボードレールが、義父オーピックが校長をしていた学校の名を出したくなかったのではないか、エリートではない民衆の行為にしたかったのではないかと勘ぐることは許されるでしょう。二月二十四日に、ビュイツソンがビュシの四つ角で、鉄砲をもって「オーピック將軍を撃ち殺せ」と叫んでいたボードレールに出会ったという、これはよく知られた話です。

二月二十四日については、軍隊と市民とが衝突した、現在のパレ・ロワイヤルの近くにあつたシャトー・ドーの戦闘と、チュイルリー宮の奪取とが後々語りつがれることになる重要な事件です。「サリュ・ピュブリック」は後者のなかの、民衆の美しい行為だけを書きました。ダニエル・ステルンは王一族の逃亡したチュイルリー宮になだれこんだ群集、アンシユルジエ叛徒の様子をくわしく描いています。頬に紅をつけ、レースや毛皮を肩にかけ、宝石や羽根飾りで髪をかざりつけた女たち、そして槍を手に、赤い縁なし帽を額に、唇をぐっと閉じ、自由の女神像よろしく不動の姿勢をとる娼婦までも⁽¹⁾。しかし、キリスト像の話は、下欄の注記に、いわば余白のように出てくるにすぎません。ドミエも「チュイルリーのパリの悪童」と題するリトグラフ（「シヤリヴァリ」四八年三月四日）を残しています。男が王座に座ると腰がめり込んで足がびよんとあがる。目をむいています。「うへっ……なんてまあ深々と」。向う側の男の一人はもう酔っ払っているようです。革命はカーニバルの様相を呈しました。その点、「サリュ・ピュブリック」は、すこぶるまじめでした。

「サリュ・ピュブリック」の基調をなすトーンは友愛です。もともとキリスト教（キリストにおける兄弟）とフリーメイソン（結社内部の友情）に関わりの深い語でした。フランス革命史家のモナ・オズーフの解釈にしたがって、⁽²⁾少しばかりこの概念について触れます。「友愛」は「民衆」とともに、二月革命の精神風土では主要なタームですから。加えて、第二共和政の時期に書かれたボードレールの散文に頻出し、詩のなかにも見出される語ですから。

意外なことですが、人権宣言でも、九三年憲法にも友愛は無視されています。自由、平等にくらべて、公式文書では影がうすい。一八三〇年の憲章もこれを無視し、自由、平等、友愛が憲法に書き込まれるのは一八四八年（十一月十二日共和国憲法）を待たねばなりません。しかし、友愛が法律の条文に出てこないことは重要ではない、友愛の語はいたるところに溢れていた、とモナ・オズーフは言います。彼女は二つの時点に注目します。一つは一七九〇年の連盟祭。「七月十四日の祭典は、……すべての人間とすべての国民を兄弟とみなすように仕向ける」（カミーユ・デムーラン）。このとき友愛は「無限の発展を担いうるように見え」、幸福感にみちていました。さまざまな民衆協会は——ジャコバン修道院に設立された協会も含めて——「友愛的」と名のついでいました。それらの民衆協会の手紙の書式として「救いと友愛を」（*Salut et fraternité*）と記す習慣が定着しました。（このサリュが後に公安委員会の名称に取りこまれるのですが、はるかにボードレールたちの「サリュ・ピュブリック」とこだましています。）境界を取り払う——国と国をもふくめて——、そういう意味をこめて、地方、郡、村などの境い目に「友愛の木」が植えられました。

ところが一方では、一七九三年に友愛は変質してゆきます。すなわち、限られた同志以外を排除する局地的で閉ざされたものとなり、計画的かつ意志的に友愛化が作動されるようになります。よりラジカルなグループが他を厄介払いし肅正する、そのかくれ蓑となる——「兄弟かさもなくば敵か」というわけです。「サルトルが明らかにしたように、あらゆる革命集団にとって、閉鎖的であることは友愛の感情に不可欠であり、暴力は集合行動と不可分なのである」（モナ・オズーフ）。暴力は内部の敵にもむけられ、監視のシステムができ上がります。

一九世紀の思想家や歴史家は、ほとんどすべてがといってよいほど、大革命の解釈に取り組みました。十九世紀の現在の理解とかかわってくるのです。ボードレールを理解するためには、詳細に立ち入る必要はありません。モナ・オズーフによ

れば、大革命を民主主義的な見方で解釈する者は友愛に消極的であり、社会主義的な解釈をとる者は、個人主義的な形式主義に反対し、社会権の主張を支えるものとして友愛を称賛しました。ルイ・フィリップ治下の七月王政期には金融ブルジョアジーを頂点とする資本主義的階級分化と個人主義化がすすみ、それに抗して「協同組織」（アソシアション）の運動がおり二月革命に流れ込みました。だから、総じていえば、一八四八年に「友愛」が巷に氾濫したのは当然です。それは「階級や民族に分裂させられた人類に対する抗議」、「個人主義を否定する強力な力」（モナ・オズーフ）となり、高い道徳秩序をきづく原理と考えられました。こういう雰囲気の中に「サリュ・ピュブリック」をおくと、この新聞の主張がよくわかります。二月革命がヨーロッパ諸国にあつというまに波及したことも、それまでになかったことです。「人類」^{ユマニテ}の思想が、赤旗に打ち勝った三色期Ⅱ共和国のそれと並んで、ある時期までは主流となりました。

友愛のシンボリック表現が各地でおこなわれた「自由の木」の植樹祭典です。パリのいたるところでこの祭がおこなわれ、フランス全土に広まります。普通は樫の木を、ときにはポプラも使いました。前述の谷川稔氏の論文によれば、三月二〇日、シャン・ド・マルスを埋めつくした民衆が「カトリック万才！ キリストの使者万才！」と連呼するなか、共和制の誕生を記念する三色旗をくくりつけた自由の木が植えられ、司祭がミサをおこない、民衆は太鼓やファンファーレでそれを迎えました。革命がおこって以来、太鼓はしょっちゅう鳴りひびき、何かというと「万才」でした。ノートル・ダム寺院前の祝典では、大司教アッフルが立ち合いました。普通選挙を経て憲法制定議会が開会した五月四日、第二共和制の正式の発足を祝うコンコルド広場の祭典では、「テ・デウム」や「ラウダ・イエルサレム」がパリの空にひびき渡ったといっています¹³。この時までに、すでに臨時政府はアルジェリア総督カヴェニャックを国防相に任命し、正規軍のパリ帰還を準備していました。六月の弾圧は用意されていたのです。植樹祭は間近い殺戮を民衆の目から覆いかくす、束の間の平和の装いだっただったのかもしれ

ません。輝かしくも脆い友愛でした。

自由の木は十字架の木とのアナロジーにおいて扱われました。キリストの役割から、おのずとそうなります。ポウマンの書物から、植樹式に列席した司祭の言葉を二つ引用します。

「市民諸君、イエス・キリストは、最初に、かの十字架の高みから、いま刻々皆さん方の口をついて出てくるすばらしい言葉を、世界全体の記憶にとどめさせたのです。それはわれわれの寺院の正面にも、また諸君の心にも刻みつけられた言葉です——自由！ 平等！ 友愛！」（市庁舎前広場の植樹、サン・ジェルヴェ教会の司祭）。

「私たちが祝福するために呼ばれたその木、フランス国民が自由の勝利を祝って選んだ木、それはキリスト教徒の信仰にかかわるまさに象徴的なある事柄を表しているのです。われらが最初の父祖の墮罪以来の、人間のすべての悲惨が木から生じているとすれば、すべての恩寵の源もまた木にあるのです。なぜなら、われわれがイエス・キリストの血を代償として贖われたのは、木において、十字の木においてであって、またキリストによる贖罪の玄義によって、われわれは罪の奴隷状態から解放され、神のまことの子の自由に引き戻されたのですから。それゆえに、政治世界がキリスト教と一致し、自由の支配を祝うべくこうして木を選び取るのは正当なのであります」。

「自由の木」の木は創世記の木、アダムの知恵の木にまでさかのぼる、そのことが私の目を惹きました。「サタンへの連祷」の〈知恵の木〉: *Arbre de Science* にはどういう含意があるのか、謎が隠されているのではないか。その果実を食べよとへびに化けたサタンがそのおかしさ。『悪の花』はその原罪の木に咲く花、と解することができます。まっとうな理解ですが、しかし、当然すぎるような気もします。詩の最後、会衆一同が唱和する祈りの形をとった部分のおわりの三行です。

私の魂が、いつの日か、〈知恵の木〉のもと、

御身のそばに憩えるようになったまえ、その木の小枝が、

新しい〈神殿〉のように御身の額の上に拡がるであらう時に！

〈知恵の木〉は原罪の木です。それがイエスの血によって、いつとき、〈自由の木〉によみがえる。そして、まもなく〈自由の木〉は滅び、地獄に座す地下の〈サタンの木〉となります。すべてが裏返しになる、と思いいたるとき、反逆詩篇のメッセージがなにほどか透けて見える。『悪の花』はしばしば世界を裏返しにしています。

さて、これだけの用意をして、ようやく「聖ペテロの否認」におけるイエスの勝利の日々の奥にある何ものかに手応えをえました。百五十年を経てから、歴史を感じとり、それにかかわるであらう詩的表象を読みとることは容易ではありません。

君は夢見ていたのか、あれほど輝かしくも美しかった日々を、

永遠の約束を果すべく君がやってきた日、

柔らかな牡ろばに乗って、花と小枝を

一面に撤き散らした道を君が踏んでいった日、

希望と勇氣に胸を一杯にふくらませ

あの卑しい商人どもをみな君が力のかぎり鞭打った日、

君がついに主人 (maître = 支配者) になった日のことを。……

革命に祝祭的な気分はつきものです。二月革命はとくにそうでした。ロマンチック革命といわれるゆえんです。だから「友愛」がシャボン玉のように、色とりどりに宙に舞い、砕け散りました。二月の至福感のなかに身を置いた一異国人の回想を最後に引いておきます。これも二月革命百念を記念して出版された資料集のなかにあります。

「私が酔ったようになっていただけではなく、みんなが酔い心地だった。ある者は度はずれた恐れで、他の者は度はずれた有頂天で、突拍子もない希望で。一日中腰をおろすこともなく、あらゆる集まり、会議、クラブ、示威行進にゆき、ひとことと言えば私は五感すべて、毛穴のすべてから、革命的雰囲気陶酔を吸いこんでいた。それは始めもない、終わりもない祭りだった。私はすべての人を見て、誰も見ていなかった。すべての人に話しかけながら、自分の言葉も人の言葉もおぼえていなかった。一步ゆくごとに、注意力がもろもろの出来事に、新しい対象に、思いがけぬニュースに呑みこまれていたからだ。

……世界全体が転倒しているようだった。信じられないことが日常的になり、不可能なことが可能なことになっていた。要するに、そのとき精神状態がこんな風だったから、誰かがもしへ神様がいま天から追放された、天上で共和国が宣言される¹⁶といったとしても、みんながそれを信じただろうし、かつ誰もそれにだまされなかっただろう。

書いたのは誰か。バクーニンです (『告白』一八五七年)。

二月の迎え方はさまざまでした。後年かなりそっけなく四八年を物語に組み込んだ『感情教育』を読めばわかります。伝えられる友人たちの話では、ボードレールはバクーニン党であったようです。

- (1) Frank Paul Bowman, *Le Christ romantique*, Droz, 1973, p.82.
- (2) *Les Quarante-huitards, présentés par Maurice Agulhon*, Collection Archives, Gallimard / Julliard, 1975.
- (3) 1848, Éditions "TEL", 1948.
- (4) 谷川稔「二月革命とヘカトリシズム」の二、阪上孝編『1848——国家装置と民衆』ミネルヴァ書房、一九八五年所収。
- (5) 右論文一六二—四頁。プロテスタントは、とくにカトリック左派からは「エゴイスムの体系」と見られていました。七月王政は、ギゾーや王妃がそうであった事情もあって、プロテスタントイスマの色彩がよかったです。
- (6) 「サリュ・ピュブリック」は一九七〇年に「*Arche du Livre*」から復刻版が出ました。以下それによって見てゆきます。
なお、『悪の花』以外のボードレールの文章はプレイアード版により、邦訳全集を参照しています。
- (7) ベンヤミン『パサーージュ論』Ⅱ、「ボードレールのパリ」岩波書店、一九九五年、四十一頁。
- (8) 谷川稔、前掲論文、一六七頁。
- (9) 同右、一五一頁。
- (10) Daniel Stern, *Histoire de la révolution de 1848*, Balland, 1985, p.173.
- (11) *ibid.*, p.174.
- (12) 以下、フランソワ・フユレ、モナ・オズーフ編『フランス革命事典』(原題 *Dictionnaire critique de la Révolution française*)、みず書房、一九九五年、項目「友愛」(阪上孝訳)に拠る。
- (13) 谷川稔、前掲論文、一六六頁。
- (14) Frank Paul Bowman, *op. cit.*, p.100.
- (15) *ibid.*, p.101. の説教は、(いつどの)司教がおこなったか記されていません。

(16) *Maintenant, N°s 9 et 10, 1848-Le Climat, les Faits, les Hommes, Éditions Grasset, 1948, p.349.*

七 六月の血が流れ

二月革命に対するブルジョア共和派、保守派のリアクションは、早ばやと仮面をかなぐり捨てました。四月十六日のデモでは、約五万といわれる無防備の労働者に対し、政府はほぼ同数の兵士を配し、さらに銃剣をもった国民衛兵（国民軍）と機動衛兵（遊動隊）を送りこみました。二月において王政側に背いた国民衛兵も、革命後労働者層が入隊したものの、士官下士官の選挙をおこなって再編成がなされ、もとどりの商店主や小事業主が主導するブルジョアの自衛組織にもどりつつありました。機動衛兵は二月二十六日（早くも！）の政府公報によって高給を与えて募集した、政府が掌握する二万五千人の私兵で、失業した青年たちが殺到しました。兵營で生活し、正規軍の軍事訓練をうけます。

五月十五日には約五万の労働者、市民が、ポーランド独立運動支援をスローガンにデモンストレーションをおこないました。ポーランド支援という政府に対する要求からみても、二月の国際的連帯の精神は生きていました。ちなみに汎ヨーロッパ的に波及した革命の波が鎮圧されたのち、諸国のナショナリズムは強烈になります。デモ隊が国会議場に押し入ったこの日の事件は、政府・警察にはめられた感があつて、ブランキはじめ左翼のリーダーが逮捕される結果をみます。

五月二十一日、コンコルド（和解）の祭典が政府主催で行われます。連盟祭の真似事でしょうか。トクヴィルはこう書いています。「フランス人が祭りや儀式のさなかに反乱を起したという例はないのである。そのようなわけでこの日の民衆は、すすんで自分たちの絵巻事の幸せのなかに身をゆだね、貧困や憎しみの記憶をいつとき脇に置いておくようにしたようだった

た。民衆は騒乱に向かうような気配は示さず、ただ活気づいていた。プログラムには、祭りは友愛に満ちた豊かさ（コンフュジョン）によって支配されねばならぬとされていた。実際そこには極度の混雑が存在していた……」。トクヴィルはピストルをポケットにしのばせていました。同僚の議員のほとんどが仕込杖や短剣や、何かの武器をたずさえていると話していました。友愛は、危険が迫ると、あるいは後に見るように危険を片付けてしまうと、いつそう声高になるのかもしれませんが。この日、トクヴィルに強烈な印象を与えたのは、「一ヶ所にこれほど多数の兵士がいる」ことでした。その閱兵行進が「祭りのなかでただ一つ真剣」でした。軍服を着た国民衛兵（国民軍）、平服や労働衣の外辺の街区の軍団（国民衛兵も階級的に分化したのです）、農民で構成された郊外の軍団、機動衛兵（遊動隊）の青年というよりも少年たち。最後に正規軍。

「この二十万の銃剣が並ぶ光景は、いつまでも私の記憶に残るだろう。銃剣をたずさえたこの兵士たちは、シャン・ド・マルスを囲む斜面の内側にはいりきるために、お互いにつめ合ってびっしりと並んでおり、そのうえ、私たちが位置しているたちよつと高くなったところからは、彼らに向ける私たちのまなざしはその銃剣とほとんど水平になったために、その銃剣はときどき波をうつつ平面のように見え、その平面は太陽にきらきら輝き、シャン・ド・マルスは鋼鉄の液体で満たされた湖のようであった。」

理性的に説明されている文章です。しかし、トクヴィルの冷静な叙述のなかで、二つの直喩があやしげに目に映ります。波をうつつ平面、はともかくとして、鋼鉄の液体で満たされた湖、には即物的な印象以上のものが感じられないでしょうか。ボードレールは海の波に、多田道太郎氏の注釈によれば、刃（Ⅱ剣）を重ねました（「人と海」）。トクヴィルは銃剣に液体を見ました。液体は揺れ、流れます。それがどの方向に波打って崩れるか。個人の力を越えた巨大な集団の力、しかも鋼の力が与える切迫的な圧力を彼は見てとりました。「長い行進をみているあいだ、私の心は暗く沈んでいった。今までのどん

な時代にも、こんなに多量の武器が一度も民衆の手に渡ったことはなかったのである¹³⁾。トクヴィルは自分の不安の由来するところを、あつさり¹⁴⁾と読者に明かします。ボードレールのように隠す必要はなかった。

ブルジョア派は苛立っていました。「けりをつけよう」が合言葉になってゆきます。軍隊は増員されてパリに集められました。

一八四八年のボードレールの行動については、あれこれ推測しないことにします。ムーケとバンデイの『一八四八年のボードレール』には、いろんな伝聞、証言が載録されており、また詩人がこの年に関係をもったらしい（真疑のほどはわからない）新聞の記事が収められていますが、それをもって何月のどの時点でどういう思想的立場をとったかを確証する手だてはありません¹⁵⁾。そういう研究もありますが。

六月二十二日から二十六日までの「六月蜂起」（「六月反乱」）において、ボードレールがピエール・デュポンと共にバリエードの労働者側にいたこと、これは友人ル・ヴァヴァスールの回想にできますが、後年の『赤裸の心』と読み合わせて間違いなからうと思われま¹⁶⁾す。ル・ヴァヴァスールによれば、冷静なピエール・デュポンとは対照的に、ボードレールは激昂して、社会主義の火花とか、社会の全面的破産の賛美とか、とまることなく喋りまくっていたということです。六月にプロレタリアの側に立つ、これは容易ならざることです。ブルジョア出自の芸術家にどれほどの行動ができたかは別として。詩人はここで、革命とは破壊と流血にはかならないことを全身でもって受けとめました。

歴史的過程はすべて省きますが、ブルジョア共和国は、下層の民衆が死にももの狂いで手向かわざるをえないように、じりじりと追いつめました。しかも、すぐには軍隊を動員しなかった。労働者の反乱とバリエードを必要としていたのです。戒厳令を背景に全権を委ねられたカヴェニヤック将軍は、軍事対決以外のことは考えずに作戦を遂行しました。「それは戦争

なのであった」と喜安朗氏は書いています。軍隊は三部隊に分れ、それぞれの攻略目標に向かいます。加えて、商店主層の構成する国民衛兵と強力な機動衛兵がいました。

民衆の武力抵抗もすさまじかった。二人の将軍が相ついで戦死しています。最後に残ったのがフォーブール・サン・タントワヌ、バスチーユ広場をとりかこむバリケードが陥落するのは六月二十六日です。反乱側には指導者も相互の連絡もなかったといわれていますが、喜安朗氏によれば、かなりの組織化もできており、アジテーターも大勢いたようです。武器もありました。革命で国民衛兵が労働者層にまで広がったからです。同じカルティエで古参の国民衛兵と労働衣の国民衛兵が対決しました。強制、強迫、煽動、陰謀が渦巻きました。各所で火薬がつけられました。これも喜安朗氏の書物によって知ったことです。当時は黒色火薬でした（無煙火薬がつけられるのは一八八四年、八六年にフランス陸軍がこれを採用します）。黒色火薬は木炭と硫黄を混ぜて粉体にすりつぶし、硝石を混ぜて磨砕するそうです。薬局店主に材料を集め処方させ、これを乾燥させるためにパン屋のパン焼き炉が使われました。この火薬を発射すると黒煙を出し、顔や手や銃身が黒くなる。反乱が鎮圧されたとき、「どこに逃げかくれようと、顔や手が黒ずんでいる者はすべて逮捕された」。さきほど述べたル・ヴァアスールの回想のなかに、「いまド・フロットが逮捕された。手に火薬のにおいがしたからか。俺の手も嗅いでくれ」とボードレールが言ったと書かれています。「サタンへの連縛」の三十一―三行の本来意味するところ、私には疑う余地がありません。

苦しむか弱い人間を慰めるために

われわれに硝石と硫黄とを混ぜ合わせる術を教えた者よ、

おおサタンよ、わが長き悲慘を憐れみたまえ！

権力側の報復のすさまじさは、どの歴史書にも書かれています。議会の副議長ギナールはノートル・ダム寺院に付属している病院の建物のなかに大砲をすえることを許可しました。病人のベッドの間から、バリケードを砲撃したのです。機動衛兵の仮借ない行動が目立ちました。捕らえられた反乱者につぎつぎ死刑を言い渡して、銃殺したといえます。社会の最下層の民衆に、飴かきをなめさせ、同じ階級の人間を殺戮させる、どこの国にも見られる権力のやり方です。容疑者狩りがしぶとくすすめられ、逮捕と処刑・流刑は途切れることなく、密告する者も数多くいました。パリの戒嚴令が解かれたのは十月十七日です。ボードレルの詩から「何かを隠している」と感じるとき、その何かの一つとして私はしばしば六月とポスト六月の様相を想起します。

画集のなかで二枚のほぼ似た構図パルリッの浅浮彫りを見たことがあります。顔もなく、衣服もなく、大人も子供も、男も女も、押しひしめいてある方向へ逃れている、あるいは連行されています。これがドミエの「移民」と名づけられている作品（二八四八―四九年）と知るまでは、とつさに第二時大戦中の大虐殺を考えました。手法も現代的です。この移民は単なる移住者ではないでしょう。牢へ、刑場へ、流刑地へ送られる人々、あるいは自分の居所から必死に逃亡しようとする人々（その足どりからみて後の見方の方が穏当かもしれません）の象徴的表現ではないでしょうか。六月は部分的ではあれ皆殺しの思想を遂行した点で、二十世紀に先駆けるものです。ボードレルの少なからぬ詩には、はるかに後期の詩にも、この六月のレミニサンスがたちのほり、ヘリメンバーとささやいています。

一八四八年の記録を集めた書物に、一連の民衆詩が載っています。このうちから二篇を例示します。まず、ユーージェヌ・ポティエの「血を飲む者」(Les Buveurs de Sang)の第一詩節。パリ、一八四八年六月と末尾にあります。

血を飲む者たち！これがわれらに与えられた名。

目指す的まきとして平等を掲げたときに与えられた名。

血を飲む者たち！投獄されたあの者たち、

銃殺された者たち！それがこの名にあたいしようか。

盲いたる富者よ、見よ、お前のグラスを満たすために

ブドウ搾り器にかけられた頻死の民衆を。

お前が飲む黄金、それはお前の兄弟の血だ。

黄金を飲む者たちこそが血を飲む者たち(おぼ)。

ボードレールには、若いころから自分の体から血が流れ出してとまらないという強迫観念があったといわれています。しかし、その血の怖れは、六月の血に触発されて、いつそうなまなましくなつたのではないのでしょうか。「時おり私は血が波打って流れ出すような気がする」に始まる、「血の泉」という少々大仰な詩があります。その第二詩節。

都市シナを横切つて、まるで決闘場のように、

血は流れてゆく、舗石を小島に変え、

生きものそれぞれの渴きを癒やしながら、

いたるところで自然をまつ赤にいろどりながら。

これは「聖ペテロの否認」などと同じく、ゴージェイエに送られた十二詩篇の一篇です。そのときは、「都市」はなぜか「市場」^{マルシェ}でした。ちなみにシテは大文字にするとパリのシテ島、カヴェニヤック軍による六月の重要な三つの攻略目標のうちの一つでした。血は別の行にも隠れています。「血の泉」の第一連第二行は「リズム正しくすすり泣く (sanglots) 泉のうに」です。「聖ペテロの否認」にも血が流れます。「刑場の殉教者や死刑囚のすすり泣き (sanglots) は／＼……これだけの血 (le sang) が流れたというのに」。引用した「血の泉」の三行目、「生きもの」(creature) には、権力者に庇護される者、その手先、という卑しめた意味もあります。ただし、「血の泉」は普通このようには解されていません。私も隠し絵をそつと透かして見たのです。ピシヨワはcreatureを文字通り被造物ととり、「この行はキリストの口から発せられてこそびつたり当てはまるだろう」と注記しています。

次はシャルル・ジルの「六月の墓」(Les Tombeaux de juin) の最後の二連です。

われらの兄弟たちが衰弱してゆく地下牢のなかで、

ひとつの聖なる希望が彼らの心臓を暖める！

彼らは成長してゆく多くの息子たちを残してきた、

殉教者は復讐する者たちを産むのだ！

彼らに罵りと侮辱を浴びせかけるがよい、

悔恨に打ちのめされることなき者たちよ、

運命だけが彼らの勇気を裏切ったのだ、

われらは彼らを愛していた、死者たちに涙する！⁽¹⁰⁾

もとよりボードレールの詩句と比べようというのではありません。これらの素朴な詩の言葉が、ひとつひとつ詳細な指摘はしませんが、ボードレールの少なからぬ詩の言葉と相通じていることに留意したいのです。そこで、ボウマンの書物からも、一例として、ボードレールとも関わりがあったラベ・コンスタン（一八五三年にエリファス・レヴィと名を変え魔法道士となります）の友人であるル・ガロワなる人の「滅ぼし（皆殺し）の天使とマルサス主義者あるいはイエスと賤民たち」から。反逆詩篇と一脈通じるところがあります。イエスが語ります。ただし、平和ではなく復讐の伝道者として。

そうだ私はまっただき愛だ、だが戦いの稲妻だ、

私はへ良い種子を抑圧するへ毒麦を除去に来た。

私は汝らをわが父のへ神殿から追い払うために来た。

私は全へ人類のためにそれを再建しに来たのだ。

私はへ平和ではなく、まさしくへ剣である

私に選ばれた者たちの抑圧者、死刑執行人のすべてに対しては。

私は各人にその権利を返しに来た、水びたしの土地を与えるのではない、

私は汝らが着るものとないまま打ち棄てる者の飢えを満たしに来たのだ。

イエスは貧者の復讐に味方しています。これらの詩句と前出の詩句とを合わせて、一八五一年初出の「憎しみの樽」を読みますと、憎しみがこの時期に渦巻いていた敵対感情と無縁でありえないことがわかります。憎しみと復讐と血は、敵対した両側から叫ばれました。イエスは抑圧者を父の神殿から追放し、新しいへ神殿を再建すると語ります。La grève はストライキではなく、水びたしの土地、砂礫と解しました。詩がいつ書かれたのか不明ですが、六月反乱の前後と推測されます。とすれば、国立作業場の労働者に、軍隊に入らぬ者はパリを離れロワール河の南に位置する不毛の地、悪疫の流行する沼沢地に向けて二十二日に出発せよという政令が出された、その土地を暗に指しているのではないのでしょうか。有名な詩「敵に、この語が出てきます。「それにまた誰がしろ、私の夢見る花々が、水びたしの砂礫のように洗われたこの土壤のなかにその活力となる神秘の糧を見出すことができるかどうか」。

最後にもう一例。「クリスト・レピュブリカン」紙が「福音書の神は貧乏人たちの神であり、サタンは金持ちの神である」として激しい論説を書きました。反論の手紙を受けて、六月十八日号に編集者は次のように応答しました。キリストは民衆に対してはやさしさにみちているが、権力者や頑冥な司祭には辛辣な言葉を投げつけており、新聞はこれに倣おうとするも

のだ。「キリストの兄弟たちとサタンの手先のあいだに、平民と貴族のあいだに闘争がおこっている」。キリストの大義が勝つためには、殉教者が出ることを受け入れなければならない――

「われわれ、貧しいプロレタリア、われわれは赤だ、なぜならキリストはわれわれを贖うために、自らの血を流されたのだから。われわれがそれによって再生しようと欲する、その血を。われわれは赤だ、なぜなら皆殺しの天使は、われわれの戸口の上に、復讐の日によって選ばれた者を見分けるために、子羊の血でもって印をつけたのだから」。

カトリック左派の新聞には、こんな記事まで載ったのです。すさまじいアジテーションです。「サタンへの連禱」(初版)の、「無慈悲で卑しい銀行家の額に」烙印を捺すサタンが連想されないでしょうか。この六月から、教員の赤狩りが始まるまでに、さほどの年月を要しません。

ボードレールの詩において、サタンの手先⇨富者・アリストクラットから、サタンの役割に逆転しました。反逆詩篇は一八四八年の裏返しです。神とサタンが入れ替わりました。

当時の文献を見てみますと、そのころ普通に、ふんだんに使われた語がボードレールに入りこんでいることがわかります。勿論、革命詩のごときものは一篇も書いておりませんが。どの党派であれ、詩にプロパガンダを持ち込めば芸術の生命はなくなるかと詩人は書いています。しかし、ボードレールが独創的な、特別な語ではなく、ありふれた語を使って詩作したこと、そして歴史の一時期と相通じながら、詩に独自の生命を注ぎこんだということは注目してよいと考えます。ペテロの詩だけを見ても、殉教者、死刑執行人、衛兵、人類、商人、支配者、剣、血……そしてイエス。

二月革命は金融資本が支配するブルジョア七月王政の否定でした。六月は二月の否定でした。二月という否定の否定です。六月を経由して、否定は詩人のうちに内面化します。

イエスは「卑しい商人ども」を否定し、古い神殿を否定し、やがて敗北し、ペテロがイエスを否定します。詩人の「私」はペテロでもあったが、イエスでもあった。否定と、否定の否定を自らのうちにかかえこむところから、苦いイロニーが生まれます。反逆詩篇における数々の裏返し、逆転は、イロニーの精神がすでに詩人を領しつつあることを証しています。

六月をもって二月の党派とカトリックの和解は否認されます。すべては秩序に復します。神は、汝盗むなかれの十戒の神になります。所有、それは盗みだと言ったブルードンは、サタンのように嫌悪されます。三幅対の標語はその後空しく残りますが、実質の標語は変わりました。所有、宗教、家族、秩序。

自由の木は、一八五〇年二月、パリを手始めに、警察の手で全国で伐られます。

(1) トクヴィル『フランス二月革命の日々』喜安朗訳岩波文庫、一二四頁。

(2) 同右書、二二六頁。

(3) 同右書、二二七頁。

(4) 「国民論壇」紙の四月十日頃の見本紙に「ボードレル氏、編集秘書」とあり、その後五月二十六日から六月六日まで毎日刊行された際もこの名が出ています。が、これが当の詩人ボードレルであるという確証はありません（阿部良雄訳全集Ⅴの注四七二頁参照）。十月二十日付の「アンドル県の代表者」紙についても同様（全集Ⅴ注四七四頁参照）。「サリュールピュブリックのような明確な参加とは異なります。他にフランキのクラブでの署名や他のクラブでの発言にかかわる伝聞など。ムーケとバンディ以後に見えられたブルードン宛の四八年八月二日付、および同日か翌日に書かれた二通の書簡があり、私たちの関心をそそります（『プレイアード版書簡集』。西川長夫「ボードレルとブルードン」〔思想〕一九七四年四月号五五頁）参照。

(5) 喜安朗『夢と反乱のフォーブル』山川出版社、一九九四年、二二二頁。

(6) 同右書、二八二頁。

(7) Mouquet et Bandy, *Baudelaire en 1848*, Édition Emile-Paul Frères, 1946, p.44.

- (8) ドーミエの「移民」(あるいは「逃亡者」)を六月反乱後の事態に結びつけることに反対する人もいます。ロベール・レーは同じころに画かれた油彩の「移民」に解説をつけ、このテーマはデーミエの「ある種の独自のオブセッションの反映」とみなしています(『ドーミエ』大島清次訳、美術出版社)。そうかもしれないが、オブセッションが「六月」によって噴出したと考えて、何の不自然もありません。少なくとも浮彫の方は、六月と結びつけないと理解しがたい作品です。レイモン・エスコリエは、この浮彫については触れていませんが、ドーミエの「革命に対する加担ぶり」を強調しています(『ドーミエとその世界』幸田礼雅訳、美術出版社)。
- (9) *Maintenant*, op. cit., p.452.
- (10) *ibid.*, p.461.
- (11) Frank Paul Bowman, op. cit., p.113. 「滅ぼしの天使」*Ange exterminateur*とはイスラエル人が約束の地へむけて出発するとき、エジプト人の長子をみな殺したと言われている天使。ここでは貧者の味方です。
- (12) *ibid.*, p.115.

八 夜へ歩む

一八四八年に起こった事態について、これは何事なのかと同時代の人々が考え込んだのは当然でしょう。七月王政期のブルジョア自由主義の歴史家オーギュスタン・ティエリやギゾーにとって二月革命はまったく理解しがたい突発的な事件と映ったようです。小倉孝誠氏の著書によってその要点だけをつかみ出しますと、中世自治都市から大革命を経て、七月革命、七月王政を迎えたとき、文明が連続して恒常的に進むことが確認されたのです。文明史はブルジョア階級の自己実現の歴史とみなされます。文明の周縁部にある民衆を視野から外すと、歴史は見通しよく合理的にすすんだことになります。王政復

古が歴史の論理を乱したあとで、歴史の流れはようやく「事物の秩序に合致するようになった」。歴史は「透明」である。理性の論理をとり戻して、「歴史の運動はそこで停止するはず」と思われました。小倉孝誠氏も書いているように、ヘーゲル流の歴史把握がなされたわけです。もはや世界形成の意味は把握されたのだ、歴史はこのまま進めばよい。つまり歴史の終わりが来たということですから。ごく最近にも、共産主義体制が崩壊したあと、「歴史の終焉」（フランシス・フクヤマ）という言葉が流行しました。しかし、ヘーゲルのあとが、フランスでいえば七月王政のあとが、そして二月のあとが実は大変なものでした。

ボードレールに「ふくろう」という無気味な詩（一八五二年初出）があります。ミネルヴァのふくろうは黄昏にのみ飛び立つ。ところが、ボードレールのそれは飛び立ちそうにありません。待って、夜へ向かって、じっと赤い目を突き出しています。ボードレールはこのころから「薄明」（クレピュスキュール）に執着するようになります。一八五二年に「二つの薄明」（「夕べの薄明」と「朝の薄明」）を発表します。薄明のもつ意味と視界の不透明性に自分に近しいものを感知するからではないでしょうか。若いころ詩人は太陽を讃える詩を書きました。その太陽は、「熱のない太陽」（初出一八五一年「ラ・ベアトリックス」のちに「ル・スプリーン」「深キ淵ノ底ヨリ我叫ビヌ」と題が変わる）、「斜めの太陽」（「ふくろう」）、「太陽は自らの凝る血の中に溺れた」（夕べの諧調）、と闇に接します。

「ぼくは、あのように堂々と始まって、あのようにはじめに敗れた二月二十四日の革命を悼んでいます。共和国は可能だったのです。ぼくはそれを見、その空気を吸ったのです。共和国は夢ではなく、存在していたのです。それがどうなったというのでしょうか。」「ぼくにとっては、ふりかえってみることに、思い出すことすら恐ろしいことです。あなたと別れてから一世紀もたったようです。あらゆる美しい夢、心からの希望が満たされ、実現される可能性を見たあとで、こんなにも深く、

こんなにも低く落ちてしまうのを見るなんて！」⁴これはゲルツェンが『向う岸にて』のなかで、ある青年に語らせている文章です。ゲルツェンに適確な回答があったわけではありません。彼はボードレールと同じように呪っています。「わたしはお前を呪う、血と狂気の年よ。俗悪と残忍と愚鈍の勝利の年よ——お前を呪う！」という言葉で、「一八四九年へのエピローグ」という章は始まります。「革命におびえる革命家たる諸君」を罵倒し、返す刀で「口舌の徒」にすぎぬ、「血はつめたく、インクだけが熱している」自分の世代を恥じています⁵。自分の内部への逆流はボードレールほどつよくありませんが、通じるものがあります。

河野健二氏は二月革命を、「それは革命というよりも、むしろ新たな社会が経験したけいれんであり、不適応故の発熱や身ぶるいであった」と評しています。しかも、それが「現代史の幕あけ」であった、と⁶。「けいれん」「発熱」「身ぶるい」という評言は、著者の意図とは別に、ボードレールから革命を考えるにふさわしい。詩人もまたこれは何だったのかとくり返し考えたにちがいありません。自らのその時期の行動や思想を、意図して、と思えるくらいに語らなかつたことは、かえってその心の内なるものを感知させます。発熱とけいれんは、死にいたるまで、その時期へのスタンスを変えながら、消えることはなかつた。「聖ペテロの否認」は、その一つのスタンスのなかで、震えるように書かれた詩です。

さらに加えて、ルイ・ナポレオンのクー・デタが止めをさします⁷。後年の手記を読むと、ボードレールはこのときにも、一部の地方、農村を除けば、少なくともパリではもはや弱体少数であった反抗グループのなかにいました。詩人はまたしても歴史の大きな曲り角に立たされました。行方になんぞ道が通じているのか、皆目わからない曲り角に。ブルジョアジー支配が続いた点において変わりはないとしても、第二共和制からクー・デタを経て第二帝政へ転換したこの意味は軽くありません。いわんや同時代を生きたボードレールにとって、クー・デタが大きな打撃であった、そのことに何の不思議もあり

ません。「また一人のボナパルトとは、何たる恥さらし！」後年の述懐ですが憤怒が生きつづけています。予測はついていたかもしれませんが、クー・デタは青天の霹靂という面もあったのではなからうかと思われれます。彼は後年、皇帝ナポレオン三世とは何であるか、と問いかけ、「彼の摂理性」^{（カ）}についてまで考えこむ（『赤裸の心』五）、摂理という観点までド・メーストールを参照して持ち出しているのですから。

加えて、パリでは六月反乱の拠点に、地方では左派の強い諸県に、ナポレオンの支持層が集中したという事情があります。もともと、すでに六月反乱のさなか、バリケードで「ナポレオン万才！」が叫ばれていたといえます。詩人は四八年の二月と六月をわが身にかかえ込んでいたその分だけ、よけいに「民衆」からも離れた自らの孤絶を知るようになるのです。こうして歴史は、ここでもボードレールの「ねじれ構造」に斜めのスポットを当てます。ちなみに、ペテロの詩が最終的に十二詩篇、「パリ評論」に見られる形になったのは、クー・デタ以後だろうと推定されています。

ボナパルティズムは、西川長夫氏が指摘するように、議会主義的ブルジョアデモクラシーに対する民衆の反感を背景にもっていました。今日的にいうと次のような問題が浮かび上がります。「ボナパルティズムやファシズムが恐ろしいのは、それらが大衆にとって、〈魅力〉をもっているからである。だがその体制を〈魅力〉的に思わせるのは、ブルジョア国家における議会主義的な権力の無能と残忍さではなからうか」。ボードレールが後年、魅力とは言いませんが、独得の言い方で、独裁者と国民大衆のある種の協和を認知していることを付記します。ボナパルトは民衆の「許可」によって支配権を得た。独裁者たちは民衆の下僕である。国民の愚かさに権力者が調子を合わせる、権力者の大衆操作に国民はすすんで協力する……、『赤裸の心』一二五はこんなふうに取り取れます。ヴィクトル・ユゴーは、彼の議会（すなわち彼の憲法、彼の共和国、彼のフランス、彼の正義）に疑うことなく軸足を置き、『小ナポレオン』や『懲罰詩集』を書きました。ボードレールから見

と、多少の羨望をともないつつも、尊大で単純、いい気なものと映ったでしょう。

四八年からクー・デタまでにボードレーが発表した詩と散文のなかで、ボードレーの心的状態をもっともよく窺っているのは、『冥府』という総題のもとに発表された詩十一篇です（一八五二年四月九日「議会通信」紙）。これについては、すでに別のところで書きましたから省きますが、基調をなすのはヘスプリーン、すなわち病的な憂鬱、得体の知れない気のふさぎ、不機嫌、すべて未決定の宙づりの気分です。ポスト六月の投影が内にとぐるを巻いているような詩も何篇も見られません。ボードレーは、そのとぐるを詩によって表しました。そして、それらはすでにかなり作られていたであろうジャンヌ・デュヴァル詩群と並んで、ボードレーが彼の流儀で近代の鬱屈を表現しうる手法を獲得しつつあったことを示しています。この時期、ボードレーはまだともかくも未決定の宙づりの状態でした。誤解の余地のないほど明らかに、彼が四年の党派たることを突きつけているポレミックな散文¹⁰、いや、散文だけではなく詩もあります¹¹。

ゲルツェンについても少し書きます。トクヴィル、マルクス、ユゴー、ゲルツェン……四八年とそれにつづく時代について回想を残した同時代人のなかで、自らが受けた衝撃においてボードレーにもっとも近いのはゲルツェンではないでしょうか。「一八四八年と一八四九年の試練を体験して、なおかつ変わらないでいられる人間がいるだろうか？」と、彼は問うています¹²。ボードレーも、クー・デタまでを含めての時期を経て、確かに変わったと、通説に反するようですが、私は考えています。詩人の若年のダンディズムと後年のダンディズムは質が違ってきます。なぜゲルツェンが打撃を受け変わったのか。アイザー・バーリンは次のようなことを述べています。すなわち、ゲルツェンにとっては、不確かな未来志向によって現在の犠牲を強いることは間違いだという思想があったこと。そして、彼もなにがしかユートピア的解釈を信じていたこと。その信念が、一八四八年、四九年において完全に破壊され、自分を憤りをこめて非難し、指導者や民衆の弱点を

見抜いたこと¹³。ボードレールの方がより「けいれん」的であり「発熱」的だったかもしれませんが、似たところもあります。イタリアにおける一八四八年三月の反乱のあと、ゲルツェンが家族とともにパリに戻ったのは五月五日でした。そして、六月を経て、ロシアのインテリゲンチヤの憂愁は極度に増幅され、ボードレールのスプリーンに似た淵に沈みこみます。若くして老いこむ感覚、希望のみならず絶望をも失う無関心をともなって。

「統殺しているのだな」——みんなは一度にいつて、たがいに顔をそむけた。わたしは窓ガラスに額を押しつけていた。このような瞬間にたいして人は、十年にわたる憎悪をいただき、生涯をかけて復讐を誓う。かかる瞬間を許すものにわざわざいあれ!¹⁴」

「わたしは精神的乞食として世をわたる——しかし子供じみた希望や熱狂は金輪際もつまい^{ol5}」
混沌と破壊こそ万才なのだ! / Vive la mort! (死よ万才)¹⁶」

ボードレールは後年、同じような万才を叫びます。

ゲルツェンは革命の死のなかに西欧文明の死をみつつ、フランスを去ります。「病室から野原へ出よう。死人に香油を塗る専門家はたくさんいるだろう。腐ったからだを養分にするうじはもつと多いだろう。死体は彼らにまかせよう。……われわれには受けつぐべき遺産もなく、またそれを必要ともしない。そして、そのことをわれわれは知っている。しからは自由に、私心なく立ち去ろうではないか¹⁷」この章には一八五〇年四月三日と日付けが書かれています。似ていませんか。

——そうだ、私は立ち去るのだ、この私は、心満ちて

行為が夢の姉妹でない世界からは。

ボードレールの方が立ち去ると言うに手間どりました。おそらく、こだわりがより強かった、夢の残像がより長く尾を曳いたのです。ゲルツェンはボードレールが感じたであろう、しかし書かなかったことを無骨に、あけすけに書いています。さて、しかし、この「私」はどこへ行くのか。詩人は死体やうじを連れてゆきます。パリは変わりますが、パリ以外に行くところがあるはずはありません。〈Anywhere out of the world〉と言うのみです。

第二帝政とボードレールについて述べることは、この文章の域外に出ます。しかし、ペテロの詩およびこれまで述べてきましたことと関わりがあるであろう、二つの観点についてのみ若干書き添えておきます。

ルイ・ナポレオンは大統領時代から十二月十日会なるものをつくり、自分の手勢としました。彼らを養うために、いんちきの宝くじさえ売り出しました。よく知られたマルクスの記述を引用します。

「この会は一八四九年のうちに始まっている。慈善協会を設立するというのは口実で、パリのルンペンプロレタリアートが秘密部門に組織され、各部門はボナパルトのスパイに組織され、全体の頂点にはボナパルト派の将軍がいた。いかがわしい生計手段をもつ、いかがわしい素性の落ちぶれた貴族の放蕩児と並んで、身を持ち崩した冒険家的なブルジョアジーの息子と並んで、浮浪者、除隊した兵士、出獄した懲役囚、脱走したガレー船奴隷、詐欺師、ペテン師、ラッツァローニ、すり、手品師、賭博師、女術、売春宿経営者、荷物運搬人、日雇いの労働者、手回しオルガン弾き、くず屋、刃物研ぎ師、鑄掛け屋、乞食、要するに、はつきりしない、混乱した、ほうり出された大衆、つまりフランス人がボエームと呼ぶ大衆であった。」¹⁸

ルイ・ボナパルトは、いかがわしさにおいて「自分の親類」の連中をかり集めた、両者は等質だというわけです。マルクスの叙述の、くそくらえといわんばかりの調子、少なくとも全面的に共感の欠如した列挙の仕方に注目してください。憎さ

げです。イギリス風の大工場の組織労働者が評価に値したのでしょう。

ところで、ボードレールは、さきに注記した「正直者」の労働者とともに、後々までこのいかがわしい連中の味方ではなかったでしょうか。『悪の花』と『パリの憂鬱』の読者ならば、容易に納得されるはずです。ボードレール自身、ボエームであったし、若年のころとは違う一種の貴族主義的（なんと貧乏な！）ダンディズムを身につけてからも、やはりボエームでありつづけました。

一八三〇年代から四〇年代にかけて、都市人口、とくに下層階級の急速な人口増大にもなつて、大都市の衛生状態は劣悪をきわめました。富永茂樹氏によると、すでにナポレオン一世のころから「監視と管理の手段としての統計学」（ゲーリ）の重要性が認められはじめ、社会の秩序安寧は健康であり、犯罪や騒乱は病んだ状態である、つまり道徳と生理は不可分であるという認識が次第に一般化しました。貧しい階級も分化してゆきます。比較的良俗を保つ労働者階級よりもさらに貧しい危険な階級を産み出す母体となる層が都市の縁辺に生まれてきます。賭博師、売春婦、浮浪者、泥棒、などのさらに周縁部に屑拾いがいます。マルクスはエリート官僚学者の公衆衛生学と共通した視点をもつことになりました。

この最下層の屑拾いにボードレール——だけではなく、ほかに数々の芸術家がありますが——はずっと関心を寄せていました。「屑拾いの酒」は『悪の花』のなかでももっとも異稿の多い詩で、井上輝夫氏のその推敲のあとをたどった論文を読めば、七月王制末期、四八年革命につづく時期、第二帝政期の都市と社会を背景にした「詩人の屑屋」が浮かび上って興味つきません。五四年一月に発表されたジャン・レザン稿の第二詩節を井上訳によって挙げます。

やってくる一人の屑拾いに出会う、詩人さながら頭をふり

躓き、壁々にぶつかりながら

そして陰気な密偵に気をかけることもなく

ぶちまける、すべて己の心を 物音しない空気のなかに。

詩人と屑屋のアナロジー。詩人＝屑屋はあとを付けられています。「屑屋はもちろん、ボヘミアンに数え入れることができない。けれどもボヘミアンに属する誰かれは、文士から職業的陰謀家にいたるまで、屑屋のなかに自己の一片を再発見することができた。誰もかれも、社会に対する漠とした反抗のなかで、多少でも不安定な朝をまえにしていた。各人が、各人なりに、社会の土台をゆさぶるひとびとに共感することができた。屑屋はかれの夢において孤立していない」(ベンヤミン)。

職業的陰謀家としてベンヤミンの念頭にまずあるのはブランキです。マルクスにいわせるとナポレオン三世となりました。ベンヤミンは、これは必ずしも納得できませんが、ボードレールのメンタリテイをナポレオン三世とブランキのそれに近づけています。そのナポレオン三世が社会の不潔な部分を切除する事業に乗り出します。オスマンによる都市の大改造、都市の美化と衛生化です。ナポレオン三世は、マルクスに彼の分身のように叙述されたうさんくさい社会的部分を削ぎ落とそうとする、歴史のおもしろいところです。

衛生とは、犯罪という社会病理を健全化し、革命、暴動を阻止するという内容を含みます。道路を通し、上下水道を設備し、公園をつくることは、国家の介入によってブルジョア道徳を強制することと表裏しています²²。道路をアスファルト舗装します。ガス燈による照明が夜も街を明るく照らします。詩人はさまざまな想いをこめてこの都市の変化を目にします。

第二帝政はかつての夜と闇を一掃しようとしてきました。しかし、ボードレールはその精神において夜へ向かって歩んでいました。『悪の花』の「悪」(le Mal)は、病でもあります。身体の病、心の病、道徳の病、都市の病。ボードレールは病を自分の居所とした。明るい都市のなかでモデルニテの美学をうちたてますが、それは夜に属する者としての美学です。「聖ペテロの否認」から「サタンへの連祷」へ、呪われた昼の神から夜の神へ、天から地下へ、この歩みを歴史と逆行して歩みます。だから詩人は、病を、不潔を、うじを、死を描き、昼と明るさ、可視の裏側に、そのアンチテーゼのうちに自己の主体のあり方の独自性を求めました。ボードレールに臭覚―香りの詩が多いのは、世界の不透明のなかに在るものの自己表現でもあります。詩人は明るい世界から、清潔な場所から追ひ払われた細民を描くとき、その人たちへの親和を断ちません。民衆神話は消えましたが、一八四八年の残像は形をかえてつづいています。その年のレミニサンスが街をとりこんだかのごとくです。

しかし、革命に対する考え方は変わりました。一つの引例でもって語らせようと思います。一八六四年か六五年、死にま近いころに書かれた『哀れなベルギー』の次のような断章です。そのころナポレオン三世に反抗する共和主義者が多くベルギーに亡命していました。「本気で革命を語るとおびえる」彼らに八つ当りしているのですが、その罵倒は並のものではありません。自分を楯にとって体当りしています。ボードレールがクー・デタ以後政治に無関心になったというのは嘘っぱちです。

「そうとも！　へ革命へ万才！

相変わらず！　にもかかわらず！

だが私はだまされやすい人間ではない！ だまされやすい人間だったことはかつてない！ 〈革命〉万才！ と、私は言う、私が〈破壊〉万才！ 〈贖罪〉万才！ 〈懲罰〉万才！ 〈死〉万才！ と言うであろうと同様にして。

犠牲者になることをよしとするだけでなく、死刑執行人になることも厭わぬだろう——〈革命〉を二様に感じるために！ われわれはみな、骨のなかに梅毒をもつように、血管のなかに共和主義精神をもっている。われわれは〈民主化〉され〈梅毒化〉（シフライリヤ）（〈文明開化〉と掛ける＝阿部注）されているのだ。」

捨身の、たたみかけるような調子は反逆詩篇と相通じます。ボードレールは彼一流の終末論、アボカリプスを書き残しています（『火箭』）。晩年にいたって、文明化の終末は梅毒化として、ついに詩人の体内に確実な証拠を得ます。

「聖ペテロの否認」においては、イエスもペテロも私も、すべて敗者に属していました。犠牲者、殉教者の側にいました。死刑執行人は向こう側にいた。「敗れた者の黒い旗」（「スプリーン」第四）がこちら側の旗でした。その後も詩人は敗残の者たちをここかしこに書いています。しかし、「私」は同時に犠牲者であり死刑執行人になります。そして、それが〈革命〉です。ペテロの詩と『哀れなベルギー』の間に、有名なイロニーの詩「ワレットワガ身ヲ罰スル者」（「私は四肢にして車裂きの輪、／そして犠牲者にして死刑執行人！」）を置きます。ボードレールのイロニーは自己のうちに内在化します。イロニーは鏡の前の人格二重化として説明されます。しかし、〈革命〉もまた二重化する。ボードレールのイロニーは政治的社会的状況によってのみ説明のつくものではありません。主体のなかの、主体を二分化する意識の作用です。しかし、主体のうちの意識のいたずらとしてのみ理解できるわけではありません。二重化の毒が体にまわるのは、スプリーンという土壌においてでした。そして、そのスプリーンのなかに詩人を投げこんだのが、ここでは触れることができなかつた女性というサタ

ンII天使を別とすれば、一八四八年でした。スプリーンがイロニーの切っ先を研ぎます。「聖ペテロの否認」一篇から、私はこんなことを読みとりました。

否定の否定と、何度か書きました。「聖ペテロの否定」は、実は、明確に他を否定しているわけではありません。神を否定しても、イエスを否定しても、それで何か別のものが生じるわけではありません。だから、ペテロの否定は捨てぜりふ風であり、あいまいであり、否定は自分に返るしかない様相を呈します。他を否定して、自己実現を展開していくわけではありません。その点において、まごうかたなき西欧近代の人であったボードレールは、その主な流れからはみ出しています。そのはみ出し者をつくったのが西欧近代であったと言っても同義かもしれません。否定を否定しても、アウフヘーベンとは無縁である。どこまでいっても否定のままです。実現すべきものは何もない。詩だけが、美学だけが、そこから生まれたとすれば、鬱屈の砂礫から咲いた花々はまことイロニックです。

- (1) 小倉幸誠『歴史と表象』新曜社、一九九七年、九六―七頁および第二章参照。
- (2) ヘーゲル哲学のこの評語は、『ラルース大辞典』では *la chouette* が用いられていて、ボードレールの *les hiboux* とは異なります。が、両者の生物学的差異をここで問う必要はありません。
- (3) ゲルツェン『向う岸から』外川継男訳、現代思潮社、一九七〇年、一〇七頁。
- (4) 同右訳書、九五頁。
- (5) 同右訳書、一六二―四頁。
- (6) 河野健二『現代史の幕あけ』岩波新書、一九八二年、二二―三頁。
- (7) 西川長夫『フランス近代とボナパルティズム』岩波書店、一九八四年、九八、一〇〇頁。
- (8) 同右書、二七頁。

(9) 松本勤「冥府から」多田道太郎編『ボードレール・詩の冥府』筑摩書房、一九八八年所収。

(10) 一例のみ挙げます。ピエール・デュボンの「労働者の歌」(一八四六年)について……「何年ものあいだ私たちは待っていたのだ、いささかなりとも力強い、真実の歌を！ いかなる党派に属しよう、いかなる偏見にはぐくまれていようと、工場の埃を吸い、綿毛を呑み込み、鉛白に、水銀に、すぐれた製作物の創造に必要なありとあらゆる毒物に身をひたし、もつとも謙虚でもつとも偉大な美德が、もつとも鈍感な悪徳や徒刑場の吐瀉物のかたわらに住みついていてはいる界隈の奥底で、蚤虱のただなかで眠る病める大衆の光景に心打たれぬことなど不可能だ。」「二月革命は待ちかねていたこの開花をうながし、民衆的な琴線の顫動をいや増した。〈革命〉のすべての不幸、すべての期待が、ピエール・デュボンの詩のなかにございました。」(ピエール・デュボン著『歌と歌謡』への序文「一八五一年」)。

(11) 働く民衆とその家族に素朴な共感を寄せた詩「正直者たちの酒」(Le Vin des honnêtes gens 初出は一八五〇年六月。後の「酒の魂」)から、第一詩節と最終詩節のみかかげます。

晩になると、ブドウ酒の魂が壇の中で歌ったものだ。

人間よ、おお私の親愛な友よ、君に向けて送り届けよう、

私のガラスの牢獄、まっ赤な封蝋にとざされた中から

光と友愛にみちた一つの歌を。

(……)

君の中へ私は落ちてゆこう、植物からとれた不死の食べ物だ、

豊饒な種子が畝のなかに落ちるように、

するとわたしたちの同盟から詩が生まれて、

大きな蝶のように神に向かって昇ってゆくだろう！

国民議会の決議によって、ワイン税は一八五〇年一月一日をもって廃止されることになっていました。ところが一八四九年十

二月二十日の本会議で再び採用されます。ボードレールはこの時期、しきりと詩や散文でブドウ酒をとりあげます。すなわち、民衆派だったのです。

- (12) ゲルツェン『過去と思索』Ⅱ、金子幸彦訳、筑摩書房、六六頁。
- (13) アイザー・バーリン「アレクサンドル・ゲルツェン」竹中浩訳、『バーリン選集3』岩波書店、三七〇―一頁。
- (14) ゲルツェン『向う岸から』前掲訳書、六三頁。
- (15) 同右訳書、六五頁。
- (16) 同右訳書、七一頁。
- (17) 同右訳書、一七七―八頁。
- (18) マルクス『ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日』植村邦彦訳、太田出版、一〇三頁。
- (19) 富永茂樹『都市の憂鬱』新曜社、Ⅱ「都市」の一「統計と衛生」による。一九九六年。
- (20) 井上輝夫「へ肩拾い」の栄光」前掲『ボードレール・詩の冥府』所収。
- (21) ベンヤミン『ボードレール』野村修訳、岩波文庫、一四七頁。
- (22) 富永茂樹、前掲書一二六頁以下参照。